看護の心をみんなの心に
5月12日は
看護の日

第8回

「忘れられない看護エピソード」集

2018年「看護の日・看護週間」

生きるを、ともに、つくる。

公益社団法人 日本看護協会

はじめに

5月12日は「看護の日」です。
近代看護を築いたナイチンゲールの誕生日にちなみ1990年に制定されました。それ以来、「看護の心をみんなの心に」をメーンテーマに厚生労働省と日本看護協会が中心となり、毎年さまざまな事業を全国各地で行っています。

2018年度は、第8回「忘れられない看護エピソード」を看護職と一般の皆さまから募集。3,439通の応募の中から、特別審査員の内館牧子さん（脚本家）らによる、よりすぐりのエピソードを20作品を収録しました。入賞作品のひとつである〈ナースの頑固道〉を映像化し、5月6日の表彰式で上映しました。

ケガや病気で入院したり、ご家族に付き添ったり。患者さんやご家族にとっても、看護にあたる看護職にとっても、心に残り、ずっと人生を支えてくれるような看護体験があります。

その後の人生を生きていく糧となるような、忘れられない言葉をもらうこともあります。看護は、人生を変えることだってあるのです。

看護にまつわる感動のエピソードが、生きる素晴らしさを思い、明日を生きていく力を生み出すきっかけになれば幸いです。

公益社団法人　日本看護協会

もくじ

最優秀賞

看護職部門

3 患者さんの鼻くそ

一般部門

4 ナースの頑固道

内館牧子賞

看護職部門

5 初めての看取り

一般部門

6 おたふく

優秀賞

看護職部門

7 お母さん、ありがとう
8 かなちゃんのがんばりノート
9 白衣の戦士

一般部門

10 血管くん、ありがとう
11 手づくりのリハビリ帳
12 ラーメンいただきます!!
～最後の職人魂～

入選

看護職部門

13 朝日
14 おにぎり
15 言葉の意味
16 フィリピンの空の下で
17 本日は最悪です。

一般部門

18 受け止めることができた死
19 奇跡は起こる
20 自分らしく生きる
21 なかよし
22 私の看護エピソード

※本書に収録したエピソードの中には、今日の医療倫理、医療安全の観点からすると、ふさわしくないとも思われる記述や表現がありますが、それぞれの方が経験した当時の状況や時代背景にかんがみ、そのままとしました。

一般部門 最優秀賞
「ナースの頑固道」を映像化

映像化作品はこちらからご覧になれます。
http://www.nurse.or.jp/portal/list01.html

右記二次元コードからもアクセスできます

第8回 忘れられない看護エピソード 看護職部門 最優秀賞

患者さんの鼻くそ

〈大阪府〉 松本 幸子 39歳

へその緒。それは、お母さんと赤ちゃんがつながっていた証し。親子の絆。桐の箱に収められ親から子へと贈り伝えられる宝物。

さながら次世代へとつなぐ命のバトン……。

「○○ベイビーのへその緒がなくなりました」。朝一番の申し送りでこの言葉を耳にしたのは助産師2年目のときでした。それまでにも何度か同じことがありました。しかし、ゴミ箱やオムツ入れの中を探せば必ず見つかりました。「きっと今回も出てくる」。根拠のない自信を抱きつつ、私たちはいつも通り業務をこなし始めました。「もう一度、病棟内を探し尽くしたけど見つからない」。夜勤者が看護師長に報告しているのを耳にしたとき、「大変なことになった」という思いと同時に、「手を尽くした結果だから仕方がない」と言い訳にも似た思いが複雑に交差しました。病棟全体が「仕方がないムード」に包まれていた午後、帰宅したはずの夜勤者の1人が疲れ切った表情で現れました。

「師長さん、やっぱり見つかりませんでした。すみません」。私は一瞬、状況が飲み込めずにいました。へその緒を諦めきれず、回収業者に連絡をし、ゴミ集積所に1人で出向いて探していたのです。看護師経験30年ぐらいのベテランさんでした。驚きを隠せない私の心を見透かしたように、すかさず師長は言いました。「例えそれが『鼻くそ』であったとしても、患者さんから預かった物は宝物のように大切に扱う。それが私たちの責任。母児、2つの命を扱う助産師の責任はもっと重たいで」と……。

その言葉が意味する、目に見えない重圧に一瞬、言葉を失いました。「助産師を生きる覚悟」を決めた、まさにその瞬間でした。

ことし、助産師18年目を迎えます。「患者さんの鼻くそ」は、事有るごとに私をあるべき方向へと導いてくれました。そして今、その覚悟を次世代へとつないでいきたいと願っています。さながら命のバトンのように……。

第8回 忘れられない看護エピソード 一般部門 最優秀賞

ナースの頑固道

〈埼玉県〉 小松崎 有美 33歳

「緊急入院です」。私が精神科に担ぎ込まれたのは去年のことだった。病名は摂食障害。体重が増えることを恐れて水さえ飲めなくなっていた。しかもこのとき妊娠7カ月。母親の命と赤ん坊の命。2つの命が危機的状況にあった。

真っ青な私とは対照的に看護師さんは太陽のようだった。その日から出産まで二人三脚が始まった。まず体重を増やすために毎食チョモランマのような白米が出された。しかし半分は机の引き出しに隠す。それでも看護師さんが来たとき、その黒い目はいっそう黒く光った。おなかに聴診器を当て、「ママ、おかわりって言ってるよ」。そう言うのだ。さらに「私はね、看護師だけど頑固師なのよ。絶対死んでほしくないの」と続ける。それを聞いて引き出しを開けずにはいられなかった。

それからというもの、巡回の際には必ず聴診器でおなかの「声」を聴いてくれた。さらに私のことを「ママ」と呼んでくれた。それによって私は一歩ずつ母親になっていった。

しかし、日がたつにつれ、出産への恐怖が強くなった。これまで満足に食事を取らなかったことで赤ん坊に何かあったらどうしよう。ああ、私は母親として失格だ。

予定日が近づくにつれ、気が遠くなる。あるときいてもたってもいられず、ナースコールを押した。不安な思いを打ち明け、泣きながら、「お母さん。お母さん」と言った。このときなぜ「お母さん」と言ったのか。今考えると看護師さんが母親のような温かい存在になっていたからだと思う。

そのとき、看護師さんが出したのは聴診器だった。最後の聴診器は私の胸に当てた。そして私の心の「声」を聴いてくれた。「つらかったね。大丈夫よ。赤ちゃんも大丈夫。ここまできたんだから、わがままにママになりなさい」

これが彼女の信念。そして頑固道。私はこの言葉で覚悟を決めた。

そして母親になった今、うまくいかないときでもずうずうしく前を向ける。そう思えるのもやはり、あの頑固師さんのおかげである。

第8回 忘れられない看護エピソード 看護職部門 内館牧子賞

初めての看取り

〈沖縄県〉 津波（つは） あけみ 53歳

精神科の看護師になって数年、忘れられないK氏との出会いがある。

K氏は、がんの末期で、骨まで転移し毎日のように痛みを訴え「痛い、痛い、もう死ぬよー。もう死ぬよー」と大きな声で、薬を要求していました。私は、仕事のたびに彼の元に足を運び、何かできることがないかを考えながら毎日を送るようになりました。

そんなある日、K氏が「もう、死ぬよ」と静かな声で話しました。私は、いつもと違うK氏に近寄り腰を落とし「もう死ぬの?」と問い掛けると、彼は「うん」と答えて遠くをまた見つめるのです。私は、なぜか「Kさんが死ぬとき、そばにいてもいい?」と許しを得るような気持ちで話すと、「いいよ」と優しい声で答えてくれました。K氏との空間が満ち足りた空気に変化しました。人はいつか死にますが、看取ることは怖いものではない、とそのとき知りました。

10日ほどたった、私が深夜勤務のときです。病棟の出入り口の鍵を開けると、自分の体に、初めて感じる清らかで張りつめた空気。「K氏は今日逝く」と確信しました。呼吸が速くなり苦しそうなK氏でしたが、年配の男性看護師の「Kさん、まだまだ死ねないよー。深呼吸してみてください」との呼び掛けに励まされ呼吸をしているようでした。声は出せなくても、死にゆく人は生きるために必死で声に応えようと、できることをしているのです。

いつもなら不眠や幻聴で苦しみ、イライラしてナースステーションに誰かしら患者さんがいるものですが、その夜はK氏が亡くなるまで苦しみを訴える患者さんはいませんでした。

私は、彼が希望していたたくさんの小銭を胸ポケットにいっぱい詰め、手には財布を持たせ、自分の両手をK氏の胸にあて「そばにいるよ。そばにいるよ。ありがとうねー。ありがとうね」と話し掛けました。1分間に5回呼吸をして、K氏は逝ってしまいました。私は、この看取りを通して、人の尊重と看護の喜びを知りました。看護の魅力は、実践の中にたくさんあるのです。

第8回 忘れられない看護エピソード 一般部門 内館牧子賞

おたふく

〈東京都〉 東（ひがし） のぶこ 70歳

結婚して5年、3度目の妊娠。

子宮頸管（けいかん）無力症からくる習慣性流産で二度も失敗したので、慎重に暮らした。安定期に入ったころにまた出血。救急車のサイレンの音が「またダメ～またダメ～♪」に聞こえて、歯を食いしばった。「三度目か……」。

もうろうとした私の目に、愛らしいおたふく顔の、看護師が映った。「大丈夫、赤ちゃんの生存、成長が確認できました。赤ちゃんはがんばっていますよ」。出血も止まり、1日数回、本当かなと思いつつ、両膝上げ体操も素直に続けた。おたふくが目を細め「赤ちゃんもママに会いたいって……」。白い歯がのぞく。希望が生まれた。夫も仕事帰りに、顔を見せる。「お前は、もう少しでママに放り出されるところだったのだよ。断固、食らいついてくれよ」とおなかをさする。出産は祈りだった。

時期を同じくして入院した隣の患者が、声を殺して泣いている。きっと流産か、死産だったのだ、と息を詰めていた。

後でその事情を知った。4人目も女の子なので、ご主人がお見舞いに来ないらしい。

「ご主人さま、お忙しいのよ。ほおら、元気な赤ちゃんよ。ママに似て美人さんだー」とカーテン越しに聞こえる、おたふくの弾むソプラノ。

1970年代は、事前に性別は知らされず、ある意味楽しみだったはずなのに。隣の患者の事情を聞き、産めるかどうかの不安でいっぱいの私は「何とぜいたくな……」とつぶやいた。

ある日、おたふくがお隣さんに「姫が4人ってうらやましいわ、『細雪』みたい。年頃になったら、おうちの中は花御殿ね」。なかなか利口な方だ。

このおたふくになら何でも話せる、頭痛の種も少し遠のいた。

不思議と、かたくななお隣さんも、日々、やわらかい表情になった。

退院の日は、赤ちゃんをいとおしそうに抱くご主人の後ろ姿を追って、満面の笑みで病室を後にしていた。

いったい、おたふくは、どんなおまじないをかけたのかしら?

きっと、「お多福（たふく）マジック」に違いない。

第8回 忘れられない看護エピソード 看護職部門 優秀賞

お母さん、ありがとう

〈滋賀県〉 水上 幸子 51歳

「母は自宅で看取りたいんです。それが母の希望でしたから」

Yさんは私と医師に向かってそう言った。医者嫌いのYさんのお母さんは93歳、食道がん末期で日に日に衰弱していったころだった。少しずつ認知症の症状も出始めていた。延命治療はせず、自然に逝かせてあげたいとの希望だった。在宅での介護はYさんにとって過酷を極めた。少しでも栄養を取らせてあげたいと、大好きなものなど工夫して与えた。しかし、すぐに嘔吐してしまう。洗濯物も増えた。特に、せん妄になったお母さんを「なだめるのがつらい」と言った。Yさんの疲れがピークとなり、ショートステイなどのサービスを使う提案をしたが、Yさんは「母をどこにも行かせたくない」と拒んだ。「喫茶店にコーヒーを飲みに行くのが楽しみだったけど、行けない」とこぼした。

訪問看護師の私は、訪問時にコーヒーを持っていき、「お家カフェ」としてYさんとつかの間の時間を過ごした。Yさんはぽつりぽつりと話し始めた。生まれてすぐにお父さんが戦地で亡くなったこと。母一人子一人で苦労したこと。結婚して家を出たが、離婚して子どもを連れて帰ってきてお母さんに自分の子どもたちを育ててもらったこと。「母はずっと働き詰めの人生だった」と。

6月のある日、お母さんはYさんや遠方にいるお孫さんたちに囲まれて眠るよう天国に逝った。亡くなられた後Yさんは言った。「私一人では看取れなかった。私は忙しかった母に抱き締められた記憶がありません。でも、介護しているうちに私が母を抱き締められるようになりました。これからは自分の子どもたちを抱き締めていこうと思います」。後日、私はYさんから聞いた話や介護での出来事を物語にしてお渡しした。2年たったある日、Yさんから連絡があった。絵心のあるYさんは物語に挿絵を入れて手作りの絵本にしたと。物語の最後にはこう締めくくられていた。「お母さん、ありがとう。生んでくれてありがとう」

第8回 忘れられない看護エピソード 看護職部門 優秀賞

かなちゃんのがんばりノート

〈愛知県〉 鈴木 美香 49歳

「ちょっとこれ見て」と、小児病棟の廊下でかなちゃんのお母さんから手渡されたノート。表紙に「かなのがんばりノート」の文字。めくると見覚えのあるヘタクソなイラストが描かれたシールがいっぱい。「全部とってあるんだ」。頬が熱くなった。

かなちゃんは10歳。白血病で初めての入院だった。明るくてよく笑うかなちゃんは注射が大嫌いで、点滴の刺し替えが決まるたびに笑顔がなくなった。

ある日、やっと入った点滴の針を固定する包帯を巻いている私に、かなちゃんが「包帯って白いだけ？ かわいい包帯ってないの？」と聞いてきた。そのころは、まだ包帯もテープも白だけだった。包帯交換用のワゴンや、処置室の棚をいくら探してもかなちゃんが喜びそうな物はどこにもない。

他の業務中もずっと考えた。そしてひらめいた。急いで幅広の白いテープを出し、「かなちゃんがんばれ」の文字とヒヨコのイラストを書いた。顔がニヤニヤしてきた。

ニヤニヤした顔のまま、かなちゃんの元へ行き、手首の包帯の上からペタリとシールを貼った。「わあ、かわいい」。かなちゃんの顔がパッと明るくなった。

「刺し替えは嫌やけど、新しいシールがもらえるからがんばれるねん」

かなちゃんの点滴は続き、シールを何枚も書いた。ノートはかなちゃんががんばった証しだ。ノートが涙でぼやけて見えた。

准看護師になりたてでミスが多く、続けていく自信がなかった私。もう辞めたいと思っていた私の心にかなちゃんはピカピカの電気を灯してくれた。こんな私でも患者さんが笑顔になるお手伝いならできると教えてもらい、そして30年たって今も看護師として働いている。

かなちゃんは数年後に天へ旅立ってしまったが、かなちゃんのピカピカの笑顔はいつもいつも私を照らしてくれる。

今日もたくさんの笑顔に出会えますように。

第8回 忘れられない看護エピソード 看護職部門 優秀賞

白衣の戦士

〈長野県〉 花岡（はなおか） こずえ 24歳

「看護師さんは白衣の天使じゃなくて、白衣の戦士だよね」

入院や処置に追われて、午前中に約束したはずのYさんの体拭きができたのは午後4時を回ってからだった。

看護師になってから3年。ミスの許されない仕事、日々こなさなければいけない業務に追われて、目標にしていた「患者さんに寄り添う看護」がどんなものなのか分からなくなっている。Yさんに「白衣の戦士」と言われたのはそんなときだった。

Yさんは肺がんを患っており、胸には抜いても抜いてもたくさんの水がたまる。その息苦しさをいつも「海で溺れているみたいだ」と言っていた。

体を拭くだけでもYさんの酸素濃度はみるみる下がり、唇はすぐに真っ青になってしまう。Yさんの苦しさが強くならないように、体拭きを数回に分けて短時間で行ったり、リハビリの担当者に呼吸法を教えてもらっていた。

ある夜勤の日、Yさんの酸素濃度の低下を知らせるアラームが鳴り、部屋に行くとYさんはまたとても苦しそうだった。少しでも息が楽になるように、呼吸に合わせて胸に手を当てたり、背中をさすったり、額の汗を拭った。SpO_2（経皮的動脈血酸素飽和度）も回復してYさんは、「あぁ苦しかった……。また海で溺れていた……。そしたら白衣の戦士が助けに来てくれた……」。

その数週間後、Yさんは家族に見守られながら息を引き取った。エンゼルケアを終えた後、酸素マスクをつけていないYさんは何だか違う人のように見えた。

Yさんは天国で胸いっぱいに息を吸えているだろうか、もう海で溺れていないといいな。

Yさんがどんな意味で私のことを「白衣の戦士」と言ったのかは分からない。もしかしたら、いつも余裕なく戦っているような険しい表情をしていたからかもしれない。でも最期に過ごした期間で、病気を相手に共に戦った戦友だと思っていてくれたならば、私はこれからも「白衣の天使」ではなく、「白衣の戦士」であり続けたいと思う。

第8回 忘れられない看護エピソード 一般部門 優秀賞

血管くん、ありがとう

〈神奈川県〉 窪田（くぼた） 健太郎（けんたろう） 29歳

自分ががんになるとは、思ってもみなかった。

20歳の誕生日を迎えた翌月、私は左大腿骨の骨肉腫と診断された。気持ちの整理がつかぬまま入院し、抗がん剤治療が始まった。

つらく厳しいものであったが、家族の励ましもあり、膝を人工関節にする手術、歩行のリハビリ、残りの抗がん剤治療を乗り切った。

無事に退院し、回復も順調。そろそろ就活を始めようと考えていた矢先だった。舌に違和感を覚え、口腔外科を受診すると、舌がんと告知された。手術を急ぐ必要があり、場合によっては言語障害が残るという。

心がポキリと折れた。私は周囲に当たり散らした。何をどうすればいいのか、分からなかった。

そんな心境で入院した初日。担当の女性看護師さんが採血に来た。止血帯で私の腕を縛ったが、なかなか血管は浮き上がらない。長く続いた抗がん剤治療の影響だった。すると、その看護師さんは私の腕をなでながら、こう言った。

「血管くん、ありがとうね。君は彼のために一生懸命がんばって、ちょっと疲れちゃったんだね。でも、彼ももう一度がんばるから、力を貸してね」

込み上げてくるものを抑えられなかった。

何て優しく、温かいのだろう。陰鬱（いんうつ）な感情が洗い流されていった。そして、自分に欠けているものが分かった気がした。

その日から、私は明るく、楽しくいようと努めた。うまくいかないときもあったが、入院生活を前向きに送る力になった。

結局、障害も残ることなく、手術は無事に終わった。私は今、模索しながら、新たな道を歩み出している。悩んだり、落ち込んだりしたときは、あの看護師さんの言葉を思い出して、腕の血管を見ることにしている。あの優しさと温かさは、これからもずっと、私の人生を支えてくれるだろう。

第8回 忘れられない看護エピソード 一般部門 優秀賞

手づくりのリハビリ帳

〈神奈川県〉 草間 利明 56歳

突然、手が動かなくなった。ぴくりともしない。こんなことが起きるのか。焦った。そのまま救急車で搬送され、即入院。病院のベッドで過ごすことになってしまった。が、嫌なことばかりではない。そこには、素晴らしい出来事も待っていた。

病名はギラン・バレー症候群。手や足などを動かす運動神経がやられてしまう病気だ。以前、女優の大原麗子さんが自宅で亡くなったときに再発していたといわれ、朝ドラのヒロインであった芳根京子さんは中学生のときに発症したが完治したと話題になった。

点滴治療を続け、スプーンから箸を使っての食事が少しできるようになったころ、看護学校の学生がやって来た。卒業を控え、実際に患者さんをみる研修のために。

看護師見習いとなった彼女は緊張していたのか、初めは体温や血圧を測るのもぎこちない。でも、真剣に取り組む姿には好感が持てた。

毎日顔を合わせるうちに、あいさつも検査もテキパキとこなすようになった。リハビリを見学してメモを取ったり、シャワーで背中を流す手伝いをしてくれたり、ベッド周りをきれいに片付けてくれたりと、そのまめまめしさには感心してしまった。

退院の前日が実習の最終日となったが、彼女は学校の用事で来られなかった。代わりに看護学科の先生があるものを手渡してくれた。

それは画用紙を5枚重ねてホチキスでとじた小冊子。これからするべきリハビリの目的、やり方、チェックリストが、手書きで記されていた。色鉛筆で仕上げたイラストが各ページを飾り、最終面には2人の似顔絵が……。ニッコリ笑った表情がとてもすてきだ。

忙しい勉強の日々の中で作ってくれていたのか。うれしかった。

「あなたは、きっと思いやりのある、優しい看護師になれます。大丈夫です」

さあ、どちらが先にゴールできるか競争だ。

第8回 忘れられない看護エピソード 一般部門 優秀賞

ラーメンいただきます!! ～最後の職人魂～

〈長野県〉 大日方 しのぶ 41歳

「病院は病気を治すところ。だから家へ帰りたい」

食道がんで余命数日を宣告されたKさん。中心静脈点滴の処置が済んだ翌日、住み慣れた自宅へ帰った。8月も初めのころだった。

Kさんは過ごす時間の全てを自分で選択し決定していた。9月も半ばごろ、「今、何を思っていますか?」と問い掛けてみた。

「母ちゃんの作るうまいラーメンが食べたい。申し訳ないが早く死にたい」

旅立つときがすぐそこまできていることも承知している。そんな中、聞いた2つの希望。食べることが無理だと分かっていて、話してくれた本当の気持ち。何とかしたくて訪問看護師に相談すると、「ラーメン食べようよ!!」。何の飾りもない一言に、一気に背中を押された。

すぐに関係者に声を掛けて集まった人数は9人。奥さんが自慢の腕を振るって作ってくれた「もやしラーメン」。最高においしかった。Kさんも少しだけスープを口にして、「塩があまいナァ」と最後の職人魂を見せた。たくさんの笑いがあり、楽しい時間の中で撮った写真。「早く死にたい」と涙を流しながら話してくれた本音。写真には満面の笑みでピースしている姿があった。元ラーメン屋のKさん。きっと皆が「おいしい」と喜んだ姿がうれしかったんだろう。笑顔であふれた写真を色紙に飾り、プレゼントすると「ありがとう。家に帰って来て本当に良かった」と言ってくれた。その数日後、奥さんへ字にならない言葉を手紙に残し穏やかに旅立った。最後のメッセージは「ありがとう。さようなら」。

ケアマネジャーとして、1カ月半の最期の時間に関われたことに、感謝しかない。あのとき、訪問看護師が「食べよう!! ラーメン!!」と私の背中を押してくれたからこそ、細やかに関わってくれていたからこそ、見ることができた満面の笑顔。たくさんの方のお看取りをされる訪問看護師。そんな看護師さんたちから、命に向き合うことをもっともっと学びたい。そして、ときには命の終い時を一緒に支援していきたい。少しでも笑ってほしいから。

第8回 忘れられない看護エピソード 看護職部門 入選

朝日

〈静岡県〉 小泉（こいずみ） 安香里（あかり） 31歳

私が看護師1年目のことだ。HCU（高度治療室）病棟で、「知識も技術も半人前でこんな私に何ができるのだろう」と悩みながら毎日の勤務に追われていた。そんな日々の中で大動脈解離を発症し、安静療法中のAさんに出会った。60歳代のAさんにとって、ベッド上での絶対安静はストレスも多く、身体的にも精神的にもつらかったと思う。

ベッド上での全身清拭も、新人の私では不安もあったと思う。しかしAさんは「あー気持ち良いなー。ありがとね。ベッドの上で寝ているだけだと、足の裏の刺激がなくてね、こんなに足の裏を気持ち良く拭いてもらえたのは初めてだよ」と言ってくれた。私はそこまで考えて拭いていたわけではなかったけれど、心からの気持ち良かったという言葉がとてもうれしかったのを覚えている。

ある夜勤の日、明け方に病棟の廊下の窓からとても大きくてきれいなオレンジ色の朝日が見えた。本当にきれいな朝日だったので、患者さんにも見てほしいと思った。頭に浮かんだのが、安静度が拡大して車いすに乗れるようになったAさんだった。Aさんを誘い、車いすを押して廊下に出ると、「こんなにきれいな朝日が見られる日が来るなんて」と喜んでくれた。

その日の勤務交代後、残った記録をしていると看護師長さんに声を掛けられた。私は、「また何か失敗したのかな」と心配になった。しかし、師長さんからは「Aさんと朝日を見たんだってね、とても喜んでいたわよ。これが看護なのよ」と言ってもらい、初めて看護師として認めてもらえたような気持ちになった。

その後、退院したAさんが私を訪ねてくれた。社会復帰されていて、Aさんが最初は誰か分からなかったけれど、元気に会いに来てくれたことが本当にうれしかった。

あれから10年。私がこうして出産後も看護師として職場に復帰し、私らしく患者さんを励ましたいと奮闘するのも、Aさんとの出会いがあったからだなと、朝日を見ると思い出す。

第8回 忘れられない看護エピソード 看護職部門 入選

おにぎり

〈青森県〉 磯沼（いそぬま） チヨ 72歳

「ばあちゃん、これ食っていいよ」と少年がおばあさんに小さなおにぎり1個を差し出しました。おばあさんは驚いた顔をして「Hが食べたらいいよ」。少年は「さっき1個食べたからいいよ。ばあちゃん、昼ご飯まだだよね」。その光景を見た私は涙ぐむばかりでした。

50年も前の、私が勤めて2年目の春の話です。外科病棟勤務でした。少年は小学校に入学したばかりで、八戸市からディーゼルカーで2時間、それからバスで1時間ほどの山奥に住んでいるということでした。入院したときはおなかが大きく膨れあがり手術予定でした。

お母さんは病気で亡くなったという。お父さんは横浜に出稼ぎに行っているので、おばあさんと2人暮らし。入院時は父親とおばあさんと3人で来ました。父親は「なかなか来られないのでよろしく」と、何度も頭を下げておりました。片道3時間はかかる道のり。来れば来たで、すぐ帰らなければならない貴重な面会です。その子はとても賢くて、さみしい顔などは見せないのです。「看護婦さん、よろしくお願いします。僕がんばりますから」と言うのです。

私は彼を自分の子のように思い、休憩時間はそばに行き、本を読んであげたり、折り紙をして遊んだりしておりました。深夜巡回に行くと布団をかぶって泣き声をこらえているのです。何度か抱っこもしてあげました。次第に体力がなくなり食欲も落ちてきたので、栄養科に、ごはんを小さなおにぎりにしてもらいました。おばあさんが面会に来る日はおにぎりを食べずに取っておくのです。私が「H君食べなさいよ」と言いますと、「ばあちゃんは白いご飯を食べたことがないんだよ。僕だってそうだよ。入院して初めて白いご飯を食べたんだよ。ばあちゃんが来ても何にもあげられないので、おにぎりを残しているんだよ。ばあちゃんに食べてほしくて」と言うのです。

みんなが貧しくとも思いやりに満ちた時代だったのかなと思います。それにしてもH君を思い出しますと、本当に心悲しくなるとともに、あんなにも慈愛にあふれた少年がいたのだと優しい気持ちになります。

第8回 忘れられない看護エピソード 看護職部門 入選

言葉の意味

〈福岡県〉 武本 東子 44歳

私は洗髪のために、50歳代の女性Aさんの元へ向かった。Aさんは四肢萎縮の状態で、日常生活援助が必要な方だった。Aさんの髪の毛は肩を10センチメートルほど過ぎる長さ。私は髪の毛を手で触り「フワッとしていますね」とAさんに笑顔で話し掛けた。洗髪が終わりタオルで巻いた髪を鏡で見ながらAさんは「今日の午後、髪の毛を切るんですよ」と言われた。

私が「あら?. どれくらい切るんですか」と聞くと、Aさんは「短くなるのかな」と返答された。私は無意識に「何で髪の毛を切ろうと思われたんですか?」と聞きながら、Aさんの髪の毛をタオルで拭いていた。Aさんは「看護師さんに迷惑が掛かるから」と言われ、私は手を止めた。続けてAさんは、「髪の毛が抜けてベッドや枕に付くし、ボサボサの髪の毛は自分ではどうしようもできないでしょう。だから、切った方が看護師さんの迷惑にならないと思うの。でも、私、髪の毛を短くしたことがないから」と話された。

看護師に迷惑が掛かるという理由で、経験のない長さに髪を切ろうとしているAさんに私は申し訳ない気持ちでいっぱいになった。私はAさんに再度髪の毛を切る理由を復唱すると、うなずかれた。「Aさん、私は申し訳ない気持ちでいっぱいです。気分転換のために髪の毛を切るなら止めませんが、看護師へ迷惑が掛かるとの気持ちで髪の毛を切るのならば、中止してください。私たちがAさんの気持ちに気付かずすみませんでした」と伝えた。

しばらく無言だったAさんは「いいんですか? このままで?. ご迷惑を掛けますよ」と言われた。私は「大丈夫です。カットのキャンセルをしましょう」と言った。Aさんと私は、満面の笑顔になれた。後日、娘さんが「母の髪の毛を切らないようにしていただき、ありがとうございました。母の面影が変わるのが嫌でした」と話されていたと知った。患者さんの一言には深い意味が込められていることに気付かされた。気付ける看護師でありたいとも思った。今もその思いは変わりません。

第8回 忘れられない看護エピソード 看護職部門 入選

フィリピンの空の下で

〈東京都〉 平田 初枝 70歳

30代のころ、フィリピンのボルネオ島に近い小さな島の病院に私はいた。水は雨水、電気もない。給食もなく、みんなが寄り添い分かち合いながら過ごしていた。そんなある日、病院の裏の部落が襲撃された。2日間、静寂が立ち込めた。

病院スタッフが、部落のある家で家族全員の遺体の傍らで、小刻みに震える毛布を発見し、病院に運び込んで来た。20代と思われる青年は、3人の子ども、妻、両親を失い、言葉を話せなくなっていた。大腿部には銃の貫通痕があり、化膿していた。私は受け持ちになり、彼の世話を行った。

とはいっても、私は彼の言語を話せず、彼は自分の思いを訴える言葉を失くしていた。何を思っているのか、病室の天井をながめ、窓から見える青い海を見つめていた。彼の表情は硬く、彼の心の中に誰も踏み込むことを許さないような氷の壁を感じた。私は毎日、傷からはい出るうじ虫を取り除き、消毒をして包帯をした。そして、ココナッツを割り、そこから取れるオイルを足につけてマッサージを行った。

心して笑顔を作りながら、「おはよう!」と声を掛け、体を拭いた。足の傷だけでなく心の傷も癒したいと願いながら、慰める言葉も励ます言葉もない私。毎日マッサージを続けた。ひと月以上ベッドでの生活が続いたこともあり、立つこともできなくなっていた。お互いに語り合うこともない日々が続いていたある日、私は急に日本に帰らなければならなくなり、後ろ髪を引かれる思いで島を離れた。

それから1年、久しぶりに島に戻った私の前に、つえを突いた背の高い青年が歩いてやって来た。ちょっぴり恥ずかしそうに、はにかむその人が、あの彼だと認識したとき、私の心は熱いものでいっぱいになった。お互いに手を握り、ただただ笑顔でうなずくだけだった。

言葉にならない喜びと感謝があふれたひととき、あれから30年がたった今でも、思い出すだけで、看護師をしていて良かったと感じられる若き日の体験。フィリピンの青い空がそこにはあった。

第8回 忘れられない看護エピソード 看護職部門 入選

本日は最悪です。

〈兵庫県〉 戸間 有里 49歳

私は、訪問看護師です。「こんにちは、Yさん今日の調子はいかがですか?」と問い掛けると、Yさんは必ず「最悪です」とニッコリ笑って返答されます。どんなに体調が悪いのかと心配になりますが、Yさんにとって「最悪」と言えるのは「調子がいい」ということなのです。

Yさんは60歳でくも膜下血腫で倒れ、脳の高次機能障害があり、不全まひもあって車いす生活を余儀なくされています。脳の障害は複雑で他人にはなかなか理解が難しいです。右脳の機能障害はさほどなく、記憶力や集中力は高く、名前を覚えることや歌、しりとりなどは問題なくこなせます。一方で、気持ちや感情を表現することは大変苦手で「痛い」「うれしい」「嫌」などの表現がうまくできません。

以前のYさんは社交家で良妻賢母だったそうです。散歩に出掛けると「Yさん、お元気ですか?」とたくさんのお友達に声を掛けられます。その際Yさんは話したいことがたくさんあるのだと思いますが、何も言えず別れ際に「あほ」「勝手にどうぞ」と心には思っていない言葉が口から出てしまうことばかりでした。自分の気持ちを表現できず、悲しそうなYさんの代わりに「さようなら」と私が返答していました。

私とYさんの関わりも4年が過ぎ、Yさんの記憶力の良さが秀でてきました。研修などでほかの看護師と同行した際に紹介すると、その看護師のフルネームを次の週も次の月でもはっきり言えるのです。「Yさん、すごいね」と言うと何ともうれしそうな、照れくさそうな表情のYさん。

そして先日、訪問から帰る際「さようなら」と声を掛けると、いつもなら無言のYさんが「ありがとうございました」とにんまり笑顔。「すごい、いつも思っていたことが言えたのね」と言うと、涙をためたYさんがほほ笑んでいました。私も涙があふれました。忘れられない瞬間です。こんな瞬間に出会えることは最高です。訪問看護はいいもんです。

第8回 忘れられない看護エピソード 一般部門 入選

受け止めることができた死

〈大阪府〉 藤井 正恵 66歳

夜中の携帯音に、飛び起きた。緩和ケア病棟からだ。

〈義兄が危ない〉

病室のドアを開けた。看護師さんが、姉の肩をしっかり抱いているのが目に入った。2人で〝死の時〟を過ごしたことがすぐに分かった。姉の目が真っ赤だった。午後9時、姉はいつもと違う呼吸に看護師さんを呼んだ。このとき、看護師さんは〝死の時〟が来たと思ったに違いない。

たくさんの写真が残されていた。姉が義兄の頬をなでる写真、Vサインする義兄の姿もあった。呼吸は、急速に顎をゆっくり動かす下顎呼吸に変わった。うろたえる姉を見た看護師さんは、義兄の腕に点滴をした。

〈いま点滴をしてもらいました。もう大丈夫〉

姉からのメールで、点滴が看護師さんの姉への優しさだったことを知った。義兄の75年が終わった。

姉夫婦は、ろうあ者だ。その上、義兄には認知症があった。耳が聞こえない2人には、耳から自然に入り知識となり得る言葉がほとんどない。痛みの程度、どんな痛さか、全てを「痛い」と表現する。

看護師さんは、さまざまな痛さの度合いの絵を作り、指さす方法を考えた。しかし、その絵の出番はほとんどなかった。身ぶり手ぶりで十分伝わった。必死で伝えようとする看護師さんの姿に、義兄はおなかを抱えて笑うこともあった。同じ言葉ばかり繰り返していたが、「ありがとう」「おいしい」「妻が一番好き」と手話で何度も言う姿が忘れられない。

看護師さんと私たちで送り支度をした。パンパンに腫れた足からパジャマを脱がすときの看護師さんの手の優しさに涙が出た。そ〜っと。そ〜っと。そして痛くないようガーゼを巻いてくれた。ゆっくり流れる時間は私たちを落ち着かせた。

〝終わる命〟をこんなにも大切に思い看護してくださった看護師さんに出会い、心が休まる思いだった。私たちは、義兄の死をしっかり受け止めることができた。

第8回 忘れられない看護エピソード 一般部門 入選

奇跡は起こる

〈福島県〉 野崎 利子 72歳

父が他界して、早7年の歳月が流れます。父を思うとき、心からの看護を受けたことに、決して忘れられない感謝の気持ちで胸が熱くなるのです。

95歳まで店の売上を数え、記帳してがんばってくれた父。でも年齢とともに、飲み込む力が徐々に弱ってきていたのでしょう。誤嚥性肺炎を起こし、呼吸が困難になり、車で20分程の病院に緊急でお世話になりました。主治医をはじめ、看護師、スタッフ一同、とても良くしてくださいました。6日目に入り、看護師から「ホントにホントに考えられないほど、次夫さんがんばっているのよ」との言葉がありました。私はその言葉がとても気になり、一晩中、父を見守りながら考えました。そして、思い当たったことは「母に会いたい一心なのでは」と。

翌朝、主治医に「父がこんなにがんばっているのは、母に会いたい一心だと思うのです。母はストレッチャーでないと来られない状態です。どうか承諾していただけないでしょうか」とお願いをしました。

主治医からは「皆と相談します。20分待ってください」と、そして「家族の思いに添います」との言葉に涙が流れました。ありがたくて、うれしくてとても心に染みるお言葉でした。すぐに家に戻り、母を連れ、「この橋を渡ると病院が見える、もう少しだ」と思ったそのとき。「次夫さん、もう危ない」との連絡を受けました。

母を1秒でも早く父の元へと思う皆の心が一つになって、4階の病室を開けたとき、奇跡が起こったのです。父の顔ぎりぎりに母の顔を寄せました。すると閉じていた父の目が静かに開き、母の顔を確かにしっかり食い入るように見たのです。看護師が手と手を重ねてくださいました。それから1時間後、父は穏やかな安心した顔で旅立ちました。あの光景は家族皆の生涯忘れえぬ大切な宝物となりました。「人に寄り添うことが看護である」。この言葉通り、父の命の炎を最後まで大切に、そしてその素晴らしい看護プレーを見させていただいたのです。

第8回 忘れられない看護エピソード 一般部門 入選

自分らしく生きる

〈東京都〉 岩下 利行 47歳

私は筋委縮性側索硬化症（ALS）患者。ALSの診断から16年、さまざまな思いが脳裏をよぎる。今は床に伏す生活を送っているが、それでも自分らしく生きている。そのきっかけとなったカンファレンス（会議）を紹介する。

ALSの診断から2年がたった2004年秋、在宅医療に移行するための会議が行われた。会議には病院の担当医と在宅の担当者、市役所と保健所の担当者、訪問看護ステーションの看護師、訪問介護事業所の責任者、そして妻が出席した。私は会議の最後に呼ばれ、在宅の担当者から次のことを言われた。

・食事は胃ろうからの経管栄養にする

・排尿、排便はベッドの上でする

・入浴はシャワー浴を止め、訪問入浴にする

担当医は安全を第一に考えてのことだったが、私には受け入れることができなかった。けれども、私が意見する雰囲気ではなく、その案が通りかけていた。

そんなときに訪問看護師が「岩下さんの意見を聞きましょう」と言ってくれた。私は介助があれば食べることも、トイレに行くことも、シャワー浴もできると思っていた。私は「やれるうちは諦めたくない」と伝えた。担当医は「何が起こるか分からない」と言って反対した。すると訪問看護師が「できる限り本人の希望に沿う形に。そのためにわれわれ訪問看護師がいるのです」と言った。結局、訪問看護師が私の状態を観察し、これまで通りの生活をすることになった。

2007年秋に胃ろうの手術、2012年の夏まで座って排便をし、シャワー浴もしていた。

何が正解かは分からないが、重要なのは本人が納得すること。そのためには病気を十分に理解し、自分らしく生活することだと思う。私にとっての「自分らしく」は、諦めないことである。できることは、たとえ時間がかかっても諦めない。どんなにつらくても生きることを諦めない。それが私の生き方だ。今日も多くの人に支えられ、自分らしく生きている。

第8回 忘れられない看護エピソード 一般部門 入選

なかよし

〈愛知県〉 星野 宏 36歳

祖父の入院もこれで最後かもしれない。そんな予感はあった。専業主婦で長年祖父と連れ添ってきた祖母は、自身も80歳を超え足腰が弱っていた。しかし、周囲が止めるのも聞かず、毎日祖父の元に通い続けた。何をするでもなく、ただ横に座り、祖父から要望があれば、それに応え、帰る。そんな毎日を繰り返していた。

祖母にとっては、それは当たり前の日常であったのかもしれない。しかし、祖父の衰弱が進み、「残念だが、もう病院でできることはない」と言われ、特別養護老人ホームなど施設を探し始めたころには、祖父は言葉を発することもままならなくなっていた。

そんなときに、1人の看護実習生が祖父の担当になった。彼女は、話せなくなった祖父と祖母が何とかコミュニケーションを取れるように、大きな五十音表を手書きで作ってくれた。そして、実習の終わりに、2人が笑顔で寄り添う似顔絵を描き、写真立てに入れてプレゼントしてくれたのだ。その絵に描かれた文字は「なかよし」。

祖父母が結婚して60年。私が母から聞かされていた2人の関係は、順風満帆といえるものではなかった。60年も連れ添っていれば、それもそうかもしれない。私は初孫としてかわいがられ、本当に祖父母を慕い、私の心の支えになっていた。その祖父母が、最後にそろって笑顔を見せてくれたのが、その似顔絵を、恥ずかしそうに、でもうれしそうに、誇らしげに私に見せてくれたときだった。

この1枚の絵が、この絵に添えられた「なかよし」という言葉が、この夫婦にとって、どれだけ大きなものだったのかは、残された祖母がこの絵を見つめる表情からうかがえる。1人の人間が生き抜いた人生の最期を笑顔で迎える。その意味は残された者が、愛する人が「故人」になった事実を受け入れる過程において重要なのだと身をもって感じることができた。きっと、この絵を描いてくれた看護実習生は、これからも看護師として多くの方の人生の最期を笑顔で迎えさせてくれるのだろう。

第8回 忘れられない看護エピソード 一般部門 入選

私の看護エピソード

〈埼玉県〉 丸山 勝也 77歳

定年退職を、2年後に控えた寒い冬の朝。体が異様にグラグラと激しく振れました。急きょ、大学病院に駆け込みました。検査の結果、悪性の脳腫瘍だったため、直ちに開頭手術を余儀なくされました。

不運にも脳幹付近に腫瘍が一部残ったのです。手術後は言語障害で、3カ月以上の苦しい車いす生活でした。

意思疎通は文字盤に頼った記憶があります。歩行器につかまって歩けるようになり、ナースステーションの前を通過しました。

すると、大勢の看護師さんたちがナースステーションから飛び出て、廊下に並んで「がんばれ! がんばれ!」の大声援です。歩けるようになった喜び、うれしい声援が脳裏で交錯しました。オイオイと号泣しながら、歩いた記憶が深く刻み込まれています。涙の海中にいるようなすさまじい形相だったでしょう。

ある医学書をひもときますと、特に怖いのは神経膠腫(グリオーマ)で超・悪性のがんだ、と記されていました。

そこで執刀医に「私の腫瘍は、神経膠腫ですか?」と恐る恐る尋ねたのです。答えは「YES」で、完全消滅の保証なしとの悲しい宣告でした。抗がん剤の点滴中に「俺はもう駄目だ」と、私は号泣をしてしまったのです。

処置中の看護師さんは、私の手を優しく握りながら「今は泣くだけ泣き、吹っ切れたらがんと闘いなさい」と、言いました。

柔らかく白い手が、私の脳裏に鮮明に刻み込まれています。

手術後、十数余年の歳月が流れました。幸いにも現在、異常の兆候はありません。この「がん戦争」、私の勝ちでしょう。

当時の看護師さんにお会いして「再発はありません」と、言いたい気持ちが込み上げてきます。

看護の心をみんなの心に

5月12日は
看護の日

www.nurse.or.jp

【主催】 厚生労働省／日本看護協会

【後援】 文部科学省／日本医師会／日本歯科医師会／日本薬剤師会／全国社会福祉協議会

【協賛】 日本病院会／全日本病院協会／日本医療法人協会／日本精神科病院協会／全国自治体病院協議会／日本助産師会／日本精神科看護協会／日本訪問看護財団／全国訪問看護事業協会／テルモ(株)／東洋羽毛工業(株)／ナガイレーベン(株)／パラマウントベッドホールディングス(株)／ワタキューセイモア(株)